

『フランス大年代記』の普及とフランス・アイデンティティ

—— パリ国立図書館写本 fr. 10132 を巡って ——

鈴木 道也*

キーワード：中世フランス、歴史叙述、ナショナル・アイデンティティ、フランス大年代記

はじめに

1274年にサン＝ドニの修道士プリマ(Primat)が完成させ、フランス国王フィリップ3世(在位1270-85)に献呈された俗語版王国年代記『フランス大年代記(Les Grandes Chroniques de France; 以下「GCF」と略記)』¹⁾は、国王シャルル6世治世(在位1380-1422)以降ヨーロッパ各地に広く普及し、それにより中世国家フランスにおける正史の地位を確実にする。現存する120点以上のGCF写本の多くは、14世紀後半から15世紀にかけて制作されたものである。GCFの後世への影響は大きく、現代歴史学もこの年代記の時代区分に沿って中世史を叙述する傾向にあることが指摘されている²⁾。

しかしその一方で、13世紀後半から14世紀半ば、つまり年代記の完成からの一世紀間に関しては、ルイ9世(在位1226-70)が国家事業のひとつとして展開したこのGCFに対する聖俗有力者の関心は必ずしも高くはなかった。1274年から、国王シャルル5世(在位1364-80)の指示で内容を大幅に改訂、拡充した新しいGCFが完成する1375年(1350年までの記述を含むこの年代記を、以下「シャルル5世のGCF」と略記)までに制作されたと考えられている写

本の数には19点で、現存する写本全体の一割強にとどまる。

本稿は、そのなかの一つ、1318年にノルマンディーの一領主がパリの書籍商に制作を依頼した写本(Paris, BN. ms. fr. 10132; 以下「写本10132」と略記)³⁾を取りあげ、写本の構成や内容からその成立事情を明らかにする作業を通じて、王権が編み出したこの新しいフランス史が、普及初期の段階で知的エリートたちの間にどのような反響を呼び起こしていたのか、あるいは起こしていなかったのか、という点について考えてみたい。それは、世俗の言葉で語られ始めたフランス史が「ひとつの歴史」から「正史」へと成長していく過程の一記録であり、フランス・アイデンティティ形成史について考察するためのひとつの手がかりとなるだろう。

I 1274年から1375年までのGCF写本

写本10132の具体的な検討に入るまえに、上で述べた普及初期の写本19点について、その概要を紹介し、あわせてその歴史的性格に関する最近の研究動向を確認しておきたい。

表1は、形態学的分析により1375年以前の制作と推定されるGCF写本について、その所蔵・分類番号、記述年代、写本制作依頼者もしくは所有者と思われる者などを記述年代の短いもの

* 埼玉大学教育学部社会科教育講座

表1 GCF 写本の普及状況 (1274-1375)

	写本番号・所蔵	記述年代	写本制作依頼者あるいは所有者と思われる者	備考
a	British Library (London) Add.Ms.38128	起源〜フィリップ2世治世	?	
b	Bibliothèque Royale de Belgique (Bruxelles) Ms.4	起源〜フィリップ2世治世	?	
c	Bibliothèque Nationale(Paris).Ms.fr.2814	起源〜フィリップ2世治世	?	
d	Bayerische Staatsbibliothek(Munich).Cod.Gall.4	起源〜フィリップ2世治世	?	
e	Bibliothèque Sainte-Geneviève(Paris).Ms.782	起源〜フィリップ2世治世	フランス王国蔵書目録 (1411年、1413年、1423年) に記録あり	
f	Bibliothèque Municipale(Saint-Omer).Ms.707	起源〜フィリップ2世治世	?	サン＝トメール教会に関する追記あり
g	個人蔵(スイス)	起源〜フィリップ2世治世	①ブルゴーニュ公ジャン (1371-1419) の署名 ②ブルゴーニュ公フィリップ (1396-1467) 蔵書目録 (1467年) に記録あり	
h	Société des Autographes des Manuscrits Français(Paris) Ex-Bute Manuscrit(委託先 Bibliothèque Nationale)	起源〜ルイ8世治世	ペリー公ジャン (1340-1416) の署名	
i	Bibliothèque Royale de Belgique (Bruxelles) Ms.14561-14564	起源〜ルイ9世治世	?	14世紀後半パリ制作の二写本と別の場所で制作された一写本の集成版
j	British Library(London).Royal 16 G VI	起源〜ルイ9世治世	グロスター公ハンフリー (1414-1447) の署名	サン＝ドニ修道士ピエール＝ドルジモンによる追記あり
k	Bibliothèque Municipale(Reims).Ms. 1469	起源〜フィリップ3世治世途中まで	ランス聖堂参事会?	ランス教会史に関する追記あり
l	Bibliothèque Nationale(Paris).Ms.fr.2615	起源〜フィリップ3世治世	?	
m	Bibliothèque Municipale (Cambrai) Ms.682	起源〜フィリップ3世治世	カンブレール助祭長ウール＝ル＝プレットル (1443) の署名	
n	Bibliothèque Royale de Belgique (Bruxelles) Ms.5	起源〜1321年	ブルゴーニュ公フィリップ (1396-1467) 蔵書目録 (1467年) に記録あり	
o	Bibliothèque Nationale (Paris) Ms.fr.10132	起源〜1329年	①シャルトルのバイ、ピエール＝オノレ筆写依頼の前文 ②ショモン領主ピエール・ダンボワーズ (-1473) の妻アンヌ・ド・ブユの署名	
p	Bibliothèque Municipale(Lyon).Ms.880	起源〜フィリップ6世治世	①シャルル6世の署名 ②ペリー公ジャンの署名	サン＝ドニ修道士 リシャール＝レスコによる加筆あり
q	Bibliothèque Nationale(Paris).Ms.fr.12720	起源〜フィリップ6世治世	リュジニャンの軍司令タンギー＝ド・シャテルの署名	サン＝ドニ修道士 リシャール＝レスコによる加筆あり
r	Bibliothèque Nationale(Paris).Ms.fr.23140	起源〜フィリップ6世治世	?	サン＝ドニ修道士 リシャール＝レスコによる加筆あり
s	Bibliothèque Municipale(Chartres).Ms.271	起源〜フィリップ6世治世	フランス王国尚書官ギョーム＝フロットの妻ジャンヌ＝ダンボワーズ (-1341年) の署名	

から順に整理したものである⁴⁾。後の時代の記述を含む GCF 写本の方がより新しいとは限らず、a から s にいたる写本相互の系譜や伝来状況に関する分類作業が進んでいない現状では、制作時期の前後関係を正確に特定することも残念ながら難しい。したがって整理はあくまで便宜的なものである。

とはいえ、GCF 写本に描かれた「フランス史」の年代的範囲は、写本の制作時期を推定するうえで一定程度有効である。1274 年にフィリップ2世(在位 1180-1223) 治世までを記して完成した GCF は、その後サン＝ドニの修道士ギョーム＝ド＝ナンジ(Guillaume de Nangis)の手になるラテン語版『ルイ9世伝』と『フィリップ3世伝』、あるいは作者不詳の『ルイ8世伝』を俗語フランス語に翻訳し、そのなかに取り込んで でいく。写本 h から写本 m まで6点の写本はいずれも彼らの著作を含んでいるが、ギョームの著作は彼がサン＝ドニ修道院で活動していた1285年から1300年にかけて著されたとされており、一連の写本の制作時期は少なくともこの

段階以前ではない⁵⁾。また1344年以降は、同じくサン＝ドニの修道士リシャール＝レスコ(Richard Lescot)が、フィリップ6世治世期を含め GCF の内容に大きな加筆、修正を施したことが確認されている⁶⁾。p、q、rの3点の写本にはこの加筆が反映されており、これらの写本の制作時期は1344年以降である。

中世王権が展開した史書編纂事業をはじめとする様々なプロパガンダ政策への関心から、GCF の普及状況をいち早く問題にしたのはベルナル＝グネである⁷⁾。彼は、ブラバント地方で制作されたと推測される一部のものを除けば(写本 n)、初期写本のほとんどがサン＝ドニ修道院を始めとするパリ周辺の工房で制作されていること、また依頼者ないしは所有者も、確認されている限りでは国王本人や王族(写本 e、g、h、n、p)あるいはノルマンディーからブラバントにかけての北フランス聖俗諸侯(k、m、o、q、s)であることを理由に、GCF の広がりが当初はきわめて限定的で緩慢なものであったことを認めている⁸⁾。もっともグネによれば、それはこの

年代記が不人気であったことを意味するものではない。中世人にとって歴史の叙述、とりわけ王国史の叙述は終わることのない営みであって、完成途上の年代記は筆写の対象とはなり得なかったのではないかと彼は推測する⁹⁾。グネは「シャルル5世のGCF」、そしてそこに描かれたフランス史を中世フランスにおける俗語版王国史叙述のひとつの到達点とみなしている。

また、GCF写本に描かれた装飾画の分析で知られるエーデマンは、初期写本群の挿絵に関して、この時期の写本の社会的機能を象徴的に示すような特徴を見いだすことは困難であるとして、画期性を認めていない。彼女によれば、初期写本の挿絵は、メロヴィング、カロリング、そしてカペーへと連なる歴代「フランス王朝」の連続性や継続性といったGCFの基本的なテーマを忠実に継承している。ひとつの事例として彼女が取りあげるのは、最初期の写本に位置づけられる写本eから筆写された写本lである¹⁰⁾。50点以上の挿絵を描いた9名の挿絵画家のうち3名について、彼らがいずれも14世紀前半に王家やサン＝ドニ修道院発行の文書作成に関与したパリの画家であったことを確認した上で、戴冠し、剣もしくは錫を持って玉座に座る王の肖像を繰り返すその挿絵群は、写本eの様式にきわめて忠実であるとした¹¹⁾。また王権の継続性を示すために、先の王朝の王たちが身につけていた王冠、あるいは彼らが従えていた獅子と全く同じデザインのものを後の王の肖像画のなかに描き込むなどのレトリックも多用されている、と指摘している¹²⁾。

このようにグネもエーデマンも初期写本の評価に関しては慎重である。しかしそうしたなかで、写本oすなわち本稿が対象とする写本10132は、他の写本に比していくつかの特徴を帯びている。まずこの写本は、リシャル＝レスコが加筆した修正版GCFを除けば、シャルル5世のGCFが完成する以前の段階で、カペー朝からヴァロワ朝へと王権が交代した1328年から29年にかけての記述を含む数少な

いGCF写本(写本o、写本s)のひとつである。第二にこの写本は、サン＝ドニ修道院など教会関係の工房ではなく、パリの俗人書籍商に依頼して制作されたものである。したがって初期GCF写本群の性格について基本的にはグネらの見解を認めるとしても、写本10132に関して、それが他の写本とはやや異なる目的と機能を有していたのではないか、という点を考えてみることは許されるだろう。

II 写本10132に描かれる「フランス史」

1. 制作依頼者

写本10132は、ノルマンディー地方ヌフシャテル＝アン＝ブレイ(Neufchâtel en Bray)の領主ピエール＝オノレ(Pierre Honoré)が、パリの書籍商トマ＝ド＝モブジュ(Thomas de Maubeuge)に注文し制作させたものとされている¹³⁾。写本の前文には次のように記されている。

「ここに、最初の諸王の時代より、王ルイにいたるフランス王の年代記が始まる。これは、ノルマンディー、ヌフシャテルのピエール＝オノレが、サン＝ドニの年代記の内容にしたがって書き記すことを、パリのノートル＝ダム新通りに住むトマ＝ド＝モブジュ親方に命じたものである。主の御年1318年。」¹⁴⁾

トマ＝ド＝モブジュは14世紀前半のパリでは良く知られた書籍商の一人で、1316年と1322年に結ばれている書籍商の組合規約にもその名を見ることができる¹⁵⁾。彼は多くの上客を抱えており、アルトワ伯、エノー伯、フランス国王ジャン2世などが顧客名簿に名を連ねている¹⁶⁾。一方ピエール＝オノレなる人物については、14世紀前半にあってフランス王家の「フランス史」に興味を抱いた一領主という以上の評価はこれまで与えられていなかった¹⁷⁾。しかし2002年の論文でこの写本の由来を分析したイサベル＝ギュイヨ・バシィにより、この人物の詳しい経歴が明らかにされることとなった¹⁸⁾。

彼女によれば、ピエール＝オノレはフィリップ三世の子ヴァロワ伯シャルルに重用された役人であり、1310年から12年にかけてシャルルの所領シャルトル（Chartres）とアランソン（Alençon）のバイイ、次いで1314/15年から少なくとも1317年の11月までアンジュー地方（Anjou）のバイイを務めていた¹⁹⁾。またヴァロワ家の会計文書目録中にも、財務役人の一人としてその名が度々確認される。写本前文に記されたノルマンディーのヌフシャテル＝アン＝ブレイは、1315年に反逆罪に問われ死刑判決を受けたフィリップ4世の重臣マリニー領主アンゲランの所領の一部であり、ヴァロワ家領に吸収された後、あらためてピエール＝オノレに所領として与えられた場所ではないかと彼女は推測する。パリ高等法院判決証書によれば、彼の死去は1319年から1321年11月頃であった²⁰⁾。しかし先述の通りこの写本には、ヴァロワ朝が成立した1329年までの出来事が記されている。したがって依頼主の死後もこの写本には筆が加えられていたことになる。

ピエール＝オノレは、フィリップ4世死後の混沌としたカペー朝末期にあって、国王を脅かすほどの勢力を誇ったヴァロワ家の重臣としてそのキャリアを全うした人物であった。彼の依頼が純粋に彼の個人的な意志によるものなのか、それとも主君であるシャルルド＝ヴァロワの意向を受けたものであるのかは不明である。しかしこの写本が、ピエールの所領があるノルマンディーの地域事情というよりは、王家との関わりのなかから産み出されたものであることは間違いないだろう。そしてそれゆえに、この写本はおそらくピエール＝オノレが制作を依頼した時には想定もしていなかった、はるかに大きな意味合いを帯びて書き継がれていったのではないと思われる。次のこの写本の構成を確認してみたい。

2. 写本の構成

写本 10132 は大きく二部分に分けられる。全

413葉のうち、終盤のフォリオ 401 から 413 までは文字も挿絵もそれまでとは全く別人の手によるものである。フォリオ 400 までが、1274 年成立の GCF に加えて、ギョーム＝ド＝ナンジを代表とするサン＝ドニの修道士が記したルイ 8 世（在位 1223-26）からルイ 10 世（在位 1314-16）にいたる国王伝記の俗語翻訳版の筆写という形態をとるのにたいして、フォリオ 401 からはサン＝ヴィクトル修道院の修道士ジャンが記した年代記『歴史の覚書（Memoriale Historiarum）』末尾部分のフランス語訳を中心に、さらに追記を施して 1329 年までの出来事を記している²¹⁾。

この二部分をさらに細かく区分すれば、まずフォリオ 400 までの前半部分に関しては、写本制作者自身がその内容をメロヴィング期、カロリング期、カペー期の三部分に分けている。この構成は、一人もしくは複数の王の治世をひとまとめにしながら全体で 18 巻から構成されていた他の GCF 写本とは異なっている。それはむしろ当時パリで知られていた別の年代記、通称『フランス史概略（Abrégé de l'histoire de France）』²²⁾ と呼ばれる、アルフォンス＝ド＝ポワティエの庇護を受けた一詩人が 13 世紀中葉に記したラテン語年代記の俗語版の構成に倣ったもので、実際この写本の前文にはこの年代記の冒頭部からの引用もうかがえる。またこの三部分について、前文は次のように説明する。

「数によってこれらの世代を見つける方法として、第一の世代に関しては、そのフォリオに i の数を、第二の世代に関しては、そのフォリオに ii の数を、そして第三の世代に関しては、iii の数を見るであろう。こうすることで、そこにある出来事を知ることができるのである。」²³⁾

フランス王朝の連続性を強調する GCF の基本方針からすれば、わざわざナンバリングして三王朝期を明確に区分する方法は、王朝交代に際して常に正当性の問題を抱えてきたフランス王権にとっては、ある種の危険性を帯びているように思われる。かつてプリマは GCF の

表 2 写本 Paris, B.N. ms. fr. 10132 の構成

フォリオ	記述年代	記 述 内 容
1-361v.	起源から 1223 年まで	トロイア起源神話からフィリップ 2 世治世まで [1274 年の GCF からの筆写]
362-400v.	1316 年まで	ギョーム＝ド＝ナンジ『サン＝ルイの生涯』およびサン＝ドニ修道院修道士による『ルイ 8 世伝』、フィリップ 3 世、フィリップ 4 世、ルイ 10 世治世に関する追記
401-413v.	1322 年まで	ジャン＝ド＝サン＝ヴィクトル『歴史の覚書』及びその続編のフランス語訳
	1324 年まで	シャルル 4 世治世半ばまでに關する記述
	1329 年まで	シャルル＝ド＝ヴァロワ及びフィリップ＝ド＝ヴァロワ治世に関する記述

編纂にあたって、シャルルマーニュ治世に全 18 巻中 6 巻を充てながら、カロリング家からカペー家への王朝交代は第 12 巻のなかでごく簡単に触れるにとどめていたはずである²⁴⁾。

他方、フォリオ 401 からの後半部分も、その内容から三つに分けることが可能である。最初は『歴史の覚書』の翻訳が終わる 1322 年までの部分、次にサン・ドニ修道院の年代記に戻り、シャルル 4 世治世(在位 1322-28)半ば、1324 年マリー＝ド＝ボエム (Marie de Bohême) の死までを記す部分、最後にサン・ドニの記述を離れ、1329 年までを記す部分、の三部分である(表 2 を参照)。最後の部分には、1329 年 12 月にシャルル 6 世の妻 ジャンヌ＝ド＝ブルゴーニュ (Jeanne de Bourgogne) がアルトワ伯領に行った臣従礼や、翌年 1 月の彼女の死去などについての記述は見られない。したがってこの写本の制作は 1330 年の初め頃には終わっていたのではないかと推測される。またこの最後の部分、1324 年から 1329 年にかけての出来事を記した人物の名は知られていない。

前半部分についていえば、王位継承の問題性が明らかになる危険を犯してまでなぜ 1316 年までの歴史を王朝ごとに三区分したのかが問われるであろう。また後半部分については、フィリップ 6 世の即位を含む、カペー最末期からヴァロワ草創期にかけて、1324 年以降 1329 年までの追記部分がいかなる内容を持つかが、この写本の性格を考えるうえでとりわけ重要であ

る。そこで以下ではギュイヨ・バシイの研究を手がかりに、1324 年以降の部分を対象に、まず 1324 年から 1329 年までの全体を通して、次いで 1328 年から 1329 年にかけての王朝交代期に限定して、記述の特徴的な部分を確認してみたい。

3. 1324 年以降 1329 年まで

1324 年以降の記述を他の GCF 写本あるいは同時代の他の史書と比較したときまず第一に目につくのは、シャルトル教会あるいは同司教区への具体的な言及である。一連の記述を通じてヴァロワ家領のシャルトルは、フランス王朝史において重要な意味を持つ聖所として読者に印象づけられることになる。例えばシャルル 4 世とジャンヌ＝デヴロー (Jeanne d'Évreux) との婚姻が結ばれた 1324 年、写本 10132 は、この婚儀が「シャルトル司教区」内で行われたと記す。また 1328 年、国王に即位したばかりのフィリップ 6 世がフランドル軍との戦いでカッセルに赴く際、その前にわざわざシャルトルへの巡礼を行ったこと、さらに翌 1329 年、ブルターニュ公とサヴォワ伯の娘の結婚式が、「シャルトルのノートル＝ダム教会」で「司教ジャン」の立ち会いのもとで執り行なわれたことが記述されている。この部分に関して例えばシャルル 5 世の GCF を確認してみると、カッセルの戦いの場面でシャルトルの名は確認されず、また 1329 年の婚儀に関しても、それを取り仕切った司教名ま

では記されてはいない²⁵⁾。

第二に、ヴァロワ伯シャルルの行状に関する言及の多さ、そして詳細さを指摘することができる。例えば、先述したマリニー領主アングランの処分を決めた1315年の3月開催の国王ルイ10世を囲む顧問会議の場で、写本10132はシャルルが主導的な役割を演じていたと記す。またパルトネー（Parthenay）領主ジャンがアヴィニオンで起こした訴訟について、彼が訴訟に勝利したこと、またその勝利がシャルルド＝ヴァロワの支援によるものであることを記述している²⁶⁾。あるいは1324年のガスコーニュ遠征に関して、まずアジャン攻略に際していかにシャルルが貢献したか書き記す一方で、彼がイングランド王エドワード2世の弟エドモンドに対してイングランド帰還を許可したことは、彼の権限を逸脱していたのではないとする当時の声については、記述そのものを省いている。

またシャルルの死に際して写本10132は、「高貴にして傑出せるシャルルド＝ヴァロワ」が「サン＝ルイの子の子」であったこと、そしてその葬儀があたかも国王のごとく盛大に執り行われたとしている²⁷⁾。シャルルの死を記す年代記は他にも見られるが、サン＝ルイを引き合いに出して彼をその孫としているのはこの写本だけである²⁸⁾。記述内容のこうした詳細さ、そしてヴァロワ家への明らかな好意から判断すると、制作依頼者であるピエール＝オノレだけではなく、1324年以降の部分を書いた自らの筆を交えながら編纂した人物もまた、ヴァロワ家のシャルルとして彼の死後はフィリップ6世の側近の一人ではなかったかと思われる²⁹⁾。

シャルルやその子フィリップは歴史叙述に高い関心を示した人物として知られている。彼らの周囲には多くの史書が残されており、1308年頃に伯シャルルが作成を命じたジラル＝ダミアン（Girard d'Amiens）の『シャルルマーニュ』、あるいは1326年頃に第一版、そして1330年頃に第二版が完成したサン＝ドニの修道士の手になる『フィリップ6世の手引き』、

さらには1331年に異端審問官として著名なベルナル＝ギー（Bernard Gui）がフィリップ6世に献呈した『年代記の華』などはその代表的なものである。ギュイヨ・バシィの指摘によれば、写本10132におけるシャルル関連の記述はとりわけ『フィリップ6世の手引き』に多くの類似点を見いだすことができるという³⁰⁾。

写本に追記が施された1320年代末の時点で、シャルルが新しい王朝の創出にとってきわめて重要な役割を果たした人物であるとの認識は、フィリップ6世および彼の周囲では共有されていた。と同時に、シャルルが残した功績に対する人々の記憶も鮮明であった。そうした記憶と認識をGCFの「フランス史」のなかに歴史として織り込もうとする写本制作者の意図を一連の記述のなかに読みとることは充分可能だろう。

4. 1328年と29年—王朝の交代—

写本10132のなかでは、1328年の王朝交代から翌1329年までが一続きのエピソードとして語られる。記述はまず1328年の2月、シャルル4世の死とその埋葬から始まる。これはフィリップ4世の系統が絶えたことを意味しており、ただちに「イングランド人とフランス人とを対立させる問題を解決するため」諸侯会議が招集されるが、そこでは、「その子（イングランド王エドワード）は、当然のこととしてではなく、慣習に従ってフランス王国を相続するべきではないし、することもできない」とされる。そこで「この問題を取り除くために」諸侯たちは摂政を置くとともに、（シャルル4世の妃ジャンヌに）娘が誕生した事実を以て、「フィリップが最も近くその権利を持つ者として」王国を継承することを取り決めた、と作者は記す³¹⁾。ナヴァール王位の問題について一節を割いた後、写本の記述は、ジャンヌが娘を出産したとの報をパリに帰還する途中で耳にしたフィリップが、「そこで彼は大きな名誉をもって王と認められ、その書状のなかで、自らを神の恩寵によりフランス王と称したのである」³²⁾と続く。そ

して最後にランスにおける戴冠をもって王位継承の場面はひとまず終わる。

ここには、1328年の王位継承が困難を伴うものであったこと、母系であることを理由とする相続の不可能性はヴァロワ家側の主張であって、それはイングランド側との間で論争となっていたことなどが素直に語られ、加えて摂政の制度が、もし先王に娘が誕生したのであればフィリップの統治を正当化する根拠となることなど、後世の史書には見られない具体性をもって新国王誕生の瞬間が叙述されている。とはいえ、そこにヴァロワ家が王位を継ぐことへの不安や不満といったものを感じることは難しい。王号を伴う書簡の存在、諸侯層の同意、そして聖別の儀礼が叙述のなかに配されることで、作者は王位の継承を正当で自然なものとして位置づけている。

翌1329年に関してはどうかであろうか。この年の重要な出来事として記されるのは、イングランドへの使節の派遣と、アミアンで挙行されたイングランド王エドワードによるフィリップに対する臣従礼の場面である。まず年代記者は、新しくフランスの王に選ばれたフィリップからイングランドに派遣された使節が、王エドワードとの面会を拒絶されたことを記す。次いで彼は、母后でありフィリップの従姉妹でもあるイザベルのところに赴いた使節が、「息子（エドワード）がよりフランス王国にとっては相応しいと考えているので、フランス王を自称するフィリップという伯の息子に、自らの息子にしてイングランド王は臣従礼をなすことはないであろう」と取り次ぎも断られてしまったことを書き加える。しかしその後で、「イングランドの諸侯達は、イングランドの王に対して、彼が臣従礼に赴き義務をなすべきこと、母が要求することができない以上、彼はフランス王国の権利を要求する根拠を有していないこと、を助言した」事実も添えている³³⁾。先年の記述同様、写本の内容はここでも率直であり、王位の継承を巡り海峡の両側で活発な議論が交わされていた様

子を具体的に伝える貴重な史料となっている。

続くアミアンでの両王の会見についても、その直前にエドワードとイングランド諸侯との意見交換の機会が設けられ、スコットランドとの抗争を抱えている以上、「別のことをなすことは出来ない」と、臣従礼の不可避を取り決めた様子が描かれている。こうした具体的な状況描写は、王エドワードが自らの意志で、また直ちに臣従礼を受け入れたと強調するリシャール＝レスコ以後のGCFからは失われている。

写本の前半部分でヴァロワ朝に至るフランス史が王朝ごとに区分されているのは、こうしたある種の楽観主義の現れとみることも可能なのではないだろうか。この点については詳細な検討を要するが、ここでは内容面からひとつ指摘しておきたい。

エーデマンの指摘によれば、初期GCF写本の挿絵のなかでは、シャルルマーニュとフィリップ2世は通例同じ大きさで描かれていたという³⁴⁾。またテキスト内においても、フィリップ2世治世の偉業そして死は常にシャルルマーニュとの対比で描かれ、両者は緊密に結び合わされていた³⁵⁾。フィリップ2世自身の婚姻を通じてカペー家とカロリング家との系譜的つながりが回復され、そのことでカペーの支配は正当化されるとみなす、いわゆる「権力環帰<reditus>」の考え方がここにははっきりと現れている。GCFの雛型ともいえる『ジャンティイ年代記』の制作が開始されたのはまさにこのフィリップ2世治世期であり、その後GCFも、またその写本もその内容と様式を忠実に繰り返してきていた。

しかし写本10132をみると、「環帰」のイメージが非常に単純化された形で明示されていることに気づく。フィリップ2世治世の冒頭、「いかにして王はある女性と結婚する、そして複数の騎士と多くの聖職者(が臨席する)」³⁶⁾との表題のもとフィリップ2世とエリザベートとの婚姻の場面が挿絵として描かれている。環帰観念を具象化していると思われるが、こうした挿

絵を持つのは初期写本群のなかではこの写本だけである。その後シャルルマーニュとカペー家とのつながりに関しては、ルイ 8 世治世の始まりに際しては次のごとく記すのみである。

「ノルマンディーを征服し尊厳者と呼ばれた王フィリップの後、上述したごとく、フランス王にしてローマ皇帝であるシャルルマーニュの家柄の子孫であったエノー伯ボードワンの娘エリザベートとの間に彼がもうけた子が、王としてフランスを治めた。」³⁷⁾

GCF の成立から半世紀以上を経てヴァロワ朝の誕生が今まさにその正当性を問われるなかで、カペー朝の歴史認識を巡る、つまりその支配の正当性あるいはメロヴィング・カロリング朝期からの連続性を問う議論は、年代記作者たちの間では実はすでに解決済みであったことを、この写本は伝えているように思われる。

おわりに

今回の検討は、これまで必ずしも積極的な評価が与えられてこなかった GCF の初期写本群に関して、その一つを制作当時の政治的社会的環境のなかに置き直してみることで、そこに当時のフランス王国における知的エリートたちの「フランス観」や「王権観」を考える手がかりを得ようとするものであった。写本 10132 の内容は、同時代人たちが有していた記憶に働きかけ、それを二人のヴァロワ家当主、シャルルとフィリップが立ち上げた新しい王朝への支持につなげようとする王フィリップの思惑をいち早く汲み取ったものになっているといえよう。

王家にきわめて近いところで制作されたにもかかわらず、パリの書籍商に制作を依頼し、また王朝交代の一方の当事者となるヴァロワ家のもとにあったことで、この写本はサン＝ドニが産み出す GCF の公的な歴史とはやや異なる内容を含むことになった。1274 年成立の GCF はルイ 9 世治世期前後におけるカペー朝の歴史観を忠実に反映したものであり、また「シャルル

5 世の GCF」は、百年戦争を戦うヴァロワ王権のいわば正統派フランス史であった。それに対して写本 10132 は、「正史」とは一定の距離を保ちながら、新王朝の成立という歴史変革期の雰囲気荒削りながら生々しく記録している。イングランド王家との間で後に深刻化する支配の正当性を巡る争いへの緊張感や配慮といったものをこの写本から読みとることは難しい。写本 10132 は、GCF 写本でありながらまた同時に、新王朝成立時におけるヴァロワ家の王権観を伝える、ひとつの独立した歴史叙述とみなすことも出来るのではないかと思われる。

この写本は後年、百年戦争期にヴァロワ王権側に立って活躍するショーモン領主ピエール＝ダンボワーズ (Pierre d'Amboise) の妻、アンヌ＝ド＝ブイユ (Anne de Bueil) の手もとにあったことが知られている³⁸⁾。ピエール＝ダンボワーズは後にシャルル 7 世やルイ 11 世の侍従も務める王の側近のひとりであった。「正史」に組み込まれることはなかったものの、この写本の史書としての生命力は、一世紀を経てもなお保たれていたと考えることができるのではないだろうか。

註

- 1) J. Viard (éd.), *Les Grandes Chroniques de France*, 10 vols., Paris, 1920-1953. 以下 GCF の引用はこの刊本からとする。
- 2) この点については、拙稿「中世フランス王権と歴史叙述」『九州国際大学社会文化研究所紀要』第 51 巻、2002 年、135-154 頁を参照。
- 3) この写本は羊皮紙を用い、サイズは 315 ミリ×220 ミリ、2 段組で 413 フォリオから成る。Henri OMONT et al., *Bibliothèque nationale. Catalogue general des manuscrits français ; Anciens Supplément Français*, Paris, 1896, t. 2, pp. 50-51, no. 10132.
- 4) 写本 c、写本 l、写本 q、写本 r については、Henri OMONT et al., *Bibliothèque*

- nationale. *Catalogue general des manuscrits français, Anciens Supplément Français*, Paris, 1895, t. 1, p. 494, no. 2814 ; p. 436, no. 2615 ; *Anciens Saint-Germain français*, t. 3, p. 57, no. 17270 ; *Anciens petits fonds français*, t. 2, p. 72, no. 23140. 写本 k、写本 m、写本 p については、Ministere de l'instruction publique et de beaux-arts, *Catalogue general des manuscrits des bibliothèques publiques de France*, t. 39 (Reims), Paris, 1904, p. 683 ; t. 17 (Cambrai), p. 259 ; t. 30 (Lyon), p. 241. 写本 n については、Ministere de l'instruction publique, *Bibliothèque Royale de Belgique, La Bibliothèque de Marguerite d'Autriche*, Brussels, 1940, p. 205, no. 1410. 写本 j については、Julius GILSON and Georges WARNER, *Catalogue of Western Manuscripts in the Old Royal and Kings Collections*, London, 1921, t. 2, pp. 209-212. 写本 e については、Amedee BOINET, *Les manuscrits a peintures de la Bibliothèque Sainte-Geneviève*, Paris, 1921, pp. 39-47, 写本 h については、Léopold DELISLE, *Recherches sur la librairie de Charles V*, Paris, 1907, t. 1, pp. 314-317, no. 91, 写本 h については、*Sotheby's Sales Catalogue, Western Manuscripts and Miniatures, Tuesday, 8 December 1981*, lot 94. 写本 g については、*Sotheby's Sales Catalogue, Western Manuscripts and Miniatures. Tuesday, 3 July 1984*, lot 47 をそれぞれ参照。またその他の写本については、Anne Dawson HEDEMAN, *The Royal Image. Illustrations of the Grandes Chroniques de France (1274-1422)*, Berkeley-Los Angeles, 1991 (以下 HEDEMAN, *The Royal Image* と略記) 巻末に付された詳細にして網羅的な写本カタログ (pp. 193-268) を参照。
- 5) Léopold DELISLE, *Mémoire sur les ouvrages de Guillaume de Nangis, Mémoire de la Société de l'Histoire de Paris et de l'Ile de France*, t. 27-2, 1873, pp. 287-372.
 - 6) J. LEMOINE, *Richard Lescot. Un nouveau Chroniqueur et une nouvelle Chronique de Saint-Denis (1268-1364)*, Paris, 1895.
 - 7) Bernard GUENÉE, *Les Grandes Chroniques de France*, Pierre NORA (éd.), *Les lieux de memoire, t.II, 1, La nation*, Paris, 1986, pp. 189-214. (以下 GUENÉE, *Les Grandes Chroniques* と略記)
 - 8) GUENÉE, *Les Grandes Chroniques*, p. 196.
 - 9) GUENÉE, *Les Grandes Chroniques*, p. 195.
 - 10) HEDEMAN, *The Royal Image*, p. 283, n. 4.
 - 11) Joan Diamond UDOVITCH, *The Papeleu Master : A Parisian Manuscript Illuminator of the Early Fourteenth Century*, 1979, t. 1, pp. 172-82 ; François AVRIL, *Manuscript Painting at the Court of France : The Fourteenth Century*, New York, 1978.
 - 12) HEDEMAN, *The Royal Image*, pp. 32-33.
 - 13) GUENÉE, *Les Grandes Chroniques*, pp. 213 ; HEDEMAN, *The Royal Image*, p. 47.
 - 14) <Ci commencent les chroniques des Roys de france depuis le temps des premiers roys qui i furent, desques au temps du roy phelippe qui fu filz phelippe li biaux et frere le Roys looys. Les queles pierres honnorez de neuf chastel en normandie fist escrire et ordener en la miniere que elles sont selonc l'ordenance des chroniques de saint denis. A mestre thomas de maubuege demourant en rue nueuve nostre dame de paris. L'an de grace nostre seigneur. mil. ccc. et xviii.>
 - 15) Paul DELALAIN, *Étude sur les libraires Parisiens du XIII^e au XV^e siècle*, Paris, 1891, pp. 10-27.
 - 16) Léopold DELISLE, *Le cabinet des manuscrits de la Bibliothèque Imperiale*, Paris, 1868-81, t. 1, p. 15, n. 9, 3, p. 304, n. 2.
 - 17) GUENÉE, *Les Grandes Chroniques*, pp. 195-201 ; HEDEMAN, *The Royal Image*, p. 47.
 - 18) Isabelle GUYOT-BACHY, *La diffusion du Roman des roys avant la Guerre de Cent Ans : la manuscrit de Pierre Honoré, serviteur de Charles de Valois*, Erik KOOPER (ed.), *The Medieval Chronicle II : Proceedings of the 2nd International Conference on the Medieval Chronicle, Driebergen/Utrecht*

- 16-21 July 1999, Amsterdam, 2002, pp. 90-102 (以下 GUYOT-BACHY, *La diffusion と略記*).
- 19) Joseph PETIT, *Charles de Valois*, Paris, 1900, pp. 298-99, 308, 348-49.
 - 20) GUYOT-BACHY, *La diffusion*, p. 91; HEDEMAN, *The Royal Image*, pp. 37-47.
 - 21) サン=ヴィクトル修道院の修道士ジャンが著した『歴史の覚書』については、Isabelle GUYOT-BACHY, *Le Memoriale historiarum de Jean de Saint-Victor: un historien et sa communauté au début du XIV^e siècle*, Paris-Turnhout, 2000 を参照。同じ著者により、近年この作品の部分訳が出版されたが [Jean de Saint-Victor (trad. Isabelle GUYOT-BACHY et D. POIREL), *Traité de la division des royaumes*, Turnhout, 2002]、著作全体とその続編に関してはすでに 19 世紀半ばの刊本が存在している。GUIGNAUT et Natalis DE WAILLY (éd.), *Recueil des Historiens des Gaules et de la France*, t. 21, pp. 632-73 et. 677-89 (以下 *RHGF*, t. 21 と略記)。この刊本は本稿がとりあげる写本 10132 を底本としている。したがってフォリオ 401 以降の内容に関する引用は以下この刊本からとする。ジャンについてはその他、C. SAMARAN, *Jean de Saint-Victor chroniqueur, Histoire littéraire de la France*, t. 41, 1981, pp. 1-23 及び M. SCHMIDT-CHAZAN, *L'Idée d'empire dans le Memoriale historiarum de Jean de Saint-Victor*, Jean-Philippe GENET (éd.), *L'historiographie médiévale en Europe*, Paris, 1991, pp. 132-45 などとも参照。
 - 22) Nataly DE WAILLY, *Examen de quelques questions relatives à l'origine des chroniques de Saint-Denis, Mémoires de l'Institut royal de France. Académie des Inscriptions et Belles Lettres*, t. 17, 1847, pp. 405-407.
 - 23) <Et pour avoir conoissance de trouver les generaciones p[ar] le nombre vous trouverez en la premier generation en chascun fueillet. i. p[ar] nombre. En la swcond. ii. et en la tierce. iii. et ainsi trouverez les choses qui i sont>, ms. fr. 10132, f. 2v.
 - 24) 拙稿『『フランス史』の誕生—『シャンティイ年代記』から『フランス大年代記』へ』鶴島博和・高田実編『歴史の誕生とアイデンティティ』日本経済評論社、2005 年、39-77 頁 (以下『『フランス史』の誕生』と略記) を参照。
 - 25) <Aneit, de l'éveschié de Chartres> <l'église Nostre-Dame de Chartres> *RHGF*, t. 21, pp. 677 et 685-86; *GCF*, t. 8, pp. 329 et t. 9, p. 48.
 - 26) *RHGF*, t. 21, pp. 681; *GCF*, t. 9, p. 24-26.
 - 27) <le nobel prince et excellent Karle de Valois> <filz du filz de saint Loys> *RHGF*, t. 21, p. 686; *GCF*, t. 9, p. 48.
 - 28) GUYOT-BACHY, *La diffusion*, p. 100, n. 17.
 - 29) Raymond CAZELLES, *La société politique et la crise de la royauté sous Philippe de Valois*, Paris, 1958.
 - 30) GUYOT-BACHY, *La diffusion*, p. 95. フィリップ 6 世の手引きに関しては、A. COVILLE, *La vie intellectuelle dans les domaines d'Anjou-Provence*, Paris, 1941, pp. 321-324.
 - 31) <que fame, ne par conséquent son filz ne devoit ne ne pavoit par coustume susceder el royaume de France> <pour tout ce trouble oster> <comme au plus prochain et de son droit> ms. fr. 10132, f. 408.
 - 32) <fu receus de tous honorablement comme rois, et se nomma en ses lettres Philippe, par la grâce de Dieu roys de France> ms. fr. 10132, f. 410.
 - 33) ms. fr. 10132, f. 410.
 - 34) HEDEMAN, *The Royal Image*, p. 37-42.
 - 35) この点については『『フランス史』の誕生』55-56 頁参照
 - 36) <Comment i rois espeuse une dame et la plusieurs chevaliers et plente de clergie> ms. fr. 10132, f. 255v.
 - 37) <Après le roy phelippe dit auguste qui conquist normandie regna en france loy son filz qu'il avoit engendre en la royne ysabel fille le conte baudouin de henaut qui estoit descendue de la lignie charlemainne le grant iadis roy de france & emperiere de rome si

comme nous avons dit dessus.> ms. fr. 10132,
f. 362.

が確認される。

38) フォリオ 18 表に本人のものと思われる署名

(2005 年 3 月 31 日提出)

(2005 年 4 月 11 日受理)